

削りながら木に吹き込まれる命

1000年以上の歴史を持つ技術

回転する角材や板に刃物を当て、手の力を加減するだけで、またたくまに美しい形の木製品が作られていきます。仏様の乗る蓮華、洒落たテーブルの脚、擬宝珠、お盆、棗、花瓶、あるいは置物の五重塔の九輪など、木製品なら、注文に応じて何でもつくりだしていきます。手許に届けられるのは、全体の寸法を記した大雑把な図面だけです。それを元に、木目を活かしながら細かいデザインは削りながら考えます。

木工挽物はかつて木地師や轆轤師と呼ばれていた人達です。歴史は古く、いまから約1100年前、皇位継承に破れた文徳天皇の第一子惟喬親王が滋賀県の山奥に逃れ、そこで村人に轆轤を教えたことに始まると伝えられています。轆轤の技術を身に付けた人達が良質の木材を求めて全国に旅立ち、木工挽物の技術が各地に広まっていきました。

椀やお盆からあらゆる木工製品まで

明治になり、日本が近代化への道を歩み始めると、さまざまな木製品が生産されるようになりました。



椀やお盆といった日用品だけではなく、住宅、家具、仏具などの部品が木地師の技術を使い生産されるようになり、大正、昭和と木工挽物は発展していきました。ところが大量生産、大量消費の時代になるにつれ、機械化やプラスチック製品が出回ります。木工挽物は轆轤の動力が人力からモーターへと変わった程度です。使用する道具も荒削りから仕上げまで基本的には3種の刃物で事足ります。

木工挽物は一見時代遅れのようにも見えますが、機械化をするには大量生産される規格品であることが前提です。仏具、オリジナル性の高い調度品を希望するレストランの椅子などの部品の生産に機械は不向きです。棗のような工芸品的価値のある小物には黒柿や鉄刃木（たがやさん）といった珍しい材を使うこともあり、美しい木目などを引き出すには機械ではなく、作業中にデザイン変更を自在にできる手づくりの方が適しています。ただ問題はなんといたっても後継者の不足です。

DATA ■名古屋木工挽物工業会

所在地：熱田区沢上一丁目7-16

- ・ 明治時代末期に親睦団体のような形で組合を設立
- ・ 昭和20年代：組合の前身となる八日会設立
- ・ 昭和32年頃：名古屋木工挽物工業会設立
- ・ 平成17年：愛知万博に合わせて開催された新世紀・名古屋城博で木工挽物の実演・販売